



江戸時代初期に日本中を掃蕩した島原・天草一揆(1637〜38年)。領主の苛政やキリシタン弾圧に耐えかねた人々が蜂起し、幕府軍が鎮圧に当たった。一揆勢が立てこもった原城は最大の激戦地。両者は、どのような思いで戦ったのか。長崎県南島原市の原城跡(国史跡)を訪ねた。  
(文・野村大輔、イラスト・河辺瑞樹)

東側の大手口跡を抜けると、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のエリアだ。緑地に囲まれた小道を歩いて本丸跡を目指す。

二ノ丸の突端部は「出丸」と呼ばれ、一揆勢と幕府軍が相対した最前線。最新の調査で、付近から一揆勢が使ったとみられる竪穴遺構が見つかった。

市教育委員会文化財課によると、えぐられた壁面に炭化物や焼土が残り、火を使う簡易施設と推定される。鉛製の十字架のほか、鉛の塊や砂岩製の鋳型が出土したため、信仰の道具を作る工房の役割も果たした可能性があるという。

一揆勢は、城に撃ち込まれた銃弾を再加工し、十字架を作ったと考えられているが、実は、火を使った痕跡が城内



### 島原・天草一揆

# 武士の「存在証明」の場



本丸跡の「埋門跡」。幕府軍が石垣を壊し、埋めた状況が読み取れる



原城跡の本丸跡。有明海を一望できる

で見当たらなかった。「ようやく生産現場らしい遺構が見つかった」と同課の伊藤健司学芸員(考古学)は話す。蜂起に至る背景は連載20回目(2024年4月10日掲載)で記した。一揆勢は島原城を攻め落とせず、天草の勢力と合流し、2万数千人が廃城となっていた原城に立てこもった。

幕府軍が出丸のそばに置いた陣地「仕寄場」の近くに、総大将を務めた板倉重昌を悼む石碑が立つ。自ら前線に立つて原城を強引に攻めたものの、一揆勢の反撃を受けて戦死した。51歳だった。大坂夏の陣は1615年。それから20年以上、戦争のない時代が続いた。実戦経験の乏しさもあり、原城を攻めあぐねた幕府軍。新たに総大将となった松平信綱が兵糧攻めに移し、戦況を変えていった。柳川藩・立花宗茂や久留米藩・有馬豊氏も戦線に加わった。70歳前後の2人は歴戦の「レジェンド」。「勇士の参戦で軍を統率できるような

つた」と長崎大の木村直樹教授(日本近世史)は指摘する。石碑は板倉が戦死したとされる地に建立された。戦闘の面影はなく、大役を果たせなかった板倉の心境は想像するほかない。無数の石が放置されていた。本丸跡の入り口付近にある「埋門跡」。一揆を鎮圧した幕府軍は原城を徹底的に壊した。掘り出された遺構は、石垣を崩し、周囲の土で埋めた破壊の過程をつぶさに伝える。

鳥取藩家臣の佐分利は陣中見舞いで島原を訪れ、参戦して命を落とした。幕府軍は九州各藩を中心に構成されたが、他藩からも陣中見舞いを口実に居残る武士がいた。木村教授によると、長州藩は50人以上の鉄砲隊を引き連れ、参戦したという。九州各藩も幕府の指示より多い軍勢で戦っていたようだ。幕府軍約12万人とされるが、木村教授は「実際は15万人以上いたのではないかと話す。

一揆勢の大部分が原城で犠牲となり、幕府軍も大勢が死傷した。「どちらも時代の犠牲者」と伊藤学芸員は語る。一揆後、島原半島南部は住民が激減し、荒れ果てたという。それぞれの強い思いがぶつかった戦い。波の穏やかな有明海を眺め、犠牲者を悼んだ。

## 一揆勢は銃弾を十字架に加工



①本丸跡の片隅に佐分利九之丞の墓がある  
②本丸跡の天草四郎像は、海に向かって祈りを捧げている



メモ 日野江城跡(国史跡・長崎県南島原市北有馬町)も見逃せない。松倉重政が島原城を建て、廃城に。仏塔の石材を使った階段遺構などが出土している。有馬キリシタン遺産記念館(同市南有馬町)は、キリスト教の伝来から繁栄、弾圧までの歴史を伝える。日野江城跡、原城跡の出土品も展示。入館料は一般300円ほか。木曜休館。電話=0957(85)3217。

